1987.01.17-鄧小平体制の維持優先　ギリギリの妥協
北海道新聞

鄧小平体制の維持優先

ギリギリの妥協

中嶋嶺雄東京外語大教授（現代中国学）は十六日、胡耀邦総書記の辞任について次のように語った。

今回の胡耀邦総書記の辞任は端的に言えば、鄧小平体制の内部分裂の露呈だ。

中国はこのところ、鄧主任主導の開放体制にさまざまな矛盾が出ていた。保守派（私は原則派と呼んでいるが）の陳雲政治局常務委員らが、このひずみを追及、かなり力をつけていた。これに対して、今秋の第十三回党大会を目前に改革派が焦りを強めていた。こうした状況を打開するために、胡耀邦氏らが、学生デモを鼓吹し「大いにやれ」と言っていたと思われる。これは胡氏の性格からして大いに有り得ることだ。今回はその責任を取らされたというのが最大の理由だろう。

中嶋教授

学生デモが思やぬ政治改革、民主化要求に発展、鄧小平主流派指導部、保守派を含めて危機感を深めたのだろう。その責任の取り方を巡って、鄧小平指導部内に分裂が起きたのだろう。

現在、開放政策の主柱となっている鄧小平氏を失脚させるわけにはいかない。そんなことをしたら、開放体制がつまずいている中国は、一挙にひっくり返ってしまう。何とか、鄧小平体制を維持しようというのが、原則派と改革派のギリギリの妥協点だった。そのため胡耀邦氏を切ることによって、事態を打開しようというのが、事の本質だろう。

今後、一時的に趙紫陽政治局常務委員（首相）が総書記代行を務めるが、問題は、第十三回党大会でだれが退陣を表明している鄧小平氏の後継者になるのか。鄧氏は後継者と目されていた胡氏を切ったわけだから、全く予断は許せなくなった。鄧氏がいてさえ、この混乱ぶりだ。八十二歳の高齢の鄧氏がいなくなったら、中国はどうなるのか、極めて不安定な政治状況になってきた。

今回の胡氏更迭は、党内手続きを踏んだとはいえ、鄧氏が自らの政治路線維持のために胡氏の首を切ったと見て間違いない、本来中央顧問委主任に過ぎない鄧氏が、党最高ポストの総書記の首を切るのはおかしい。これが中国の今の政治の体質なのだ。